

のいう「親切さ (kindness)」の判断にもみられるのかを検討したところ、そこにも存在することが見られた。この結果は、「児童の『親切さ』の判断に関する一研究」と題して、11月下旬の日本教育心理学会第24回総会で発表する。これは、なるべく早い機会に論文としてまとめる予定でいる。

昨年12月に、次の論文が公刊された。

「児童の道徳的判断の一指標としての反応潜時の検討」
教育心理学研究 第29巻 358～362

2. 共同研究について

久世敏雄教授を中心とした青年の社会的態度に関する

縦断的調査研究に参加してきた。この研究成果は、本紀要の「中学生・高校生の社会的態度に関する縦断的研究 (V)」にまとめられている。

また、昨年に引続き中学生の進路選択にかかわる問題について、久世敏雄教授の指導により実施した調査の結果を整理した。この成果は、本紀要の「中学3年生の生活意識に関する一研究」としてまとめられている。

3. その他

成田錠一・白岩義夫編の「児童心理学」(保育叢書第12巻, 福村出版)の中の第5章「知覚・認知」を今川峰子氏(聖徳学園女子短大)と共同で執筆した。

研究経過報告

増井透

昨年度から今年にかけて主に2つのテーマに係わってきた。ひとつは視覚的イメージであり、もうひとつは物語理解の過程である。一見かけ離れたテーマのようだが、いわゆる representation の問題を捉えるうえで根はつながっていると考えている。

イメージについてはここ2年ほど続けて科学研究費の補助が受けられたので、マイクロコンピュータを中心とする実験装置の拡張を計り、実験の自動化をめざした。イメージ論争も落ちつきを見せているものの、やはり本当に必要なものは「信用」するに足るパラダイムとデータであろう。昨年度から行なってきた probe verification の実験では知覚データを用いての処理とイメージデータを用いての処理とが同じパラメータに支配されることから、両者の等価性を論ずるための少なくとも十分条件を確認した。これをどこまで必要条件足らしめるかが今

年度の残りの課題となる。

物語理解に関する考え方の一端は昨年度の紀要に書いた。今年はデータベースとしての script 構造について試験的実験を行なった以外は特に実験はせず、これまでの成果のまとめと、今後の計画をたてることに目下のところ終始している。

マイクロコンピュータは3機種が導入された。それぞれ長短あるが、画面制御、時間制御、それに漢字仮名を扱うことが何とか可能になり、実験はかなり楽になったといえる。次の課題はより高速かつ広範な活用のためのコンピュータコミュニケーションであるが、若干の下準備を開始した。

その他、「認知心理学概論」を共訳した。認知心理流のわりには、適切な邦書が未だに殆んど見うけられないことにいくばくかの責任を感じつつ。

研究経過報告

河合優年

56年4月に本教室の助手として着任してから、あっという間に1年以上が経過した。この1年間何をしてきたのかと振り返ってみると、あまりたいした事はできていないようにも思える。おそらく、主たる関心領域である大脳半球機能差だけでなく近接領域にもくびをつっ込みすぎたためではないかと思われる。反省の意味も加え、56年4月から57年7月までの研究経過を整理しておきたい。

I 大脳半球機能差に関する研究

Kinsbourne タイプの実験方法を用い、成人の半球機能差をとらえる試みを繰り返してきた。この結果の一部は、心理学研究に発表された。「非言語的負荷による片半球の活性化が左右視野における刺激検出へ及ぼす影響」心理学研究, 52巻4号 240—243

また、小嶋秀夫助教授ならびに金沢医科大学の鋤柄増根氏と共同で、場依存性、場独立性と大脳半球機能差の